

らじかる

第4号

エマ・ゴールドマン・アンソロジー

「女性解放の悲劇」配布開始

何故、ヘルクマンの暴力を賞讃したエマは、ロシア革命が暴力的に進行していた、その真最中に、マフノの暴力を否定したのか？ボルシェヴィキへの幻想を捨てようとしなかったエマ！そのエマのゴーリキーへの幻滅。そこには、初めて革命に投げ込まれたアナキストの混乱がある。生涯を革命とアナキズムに賭けたエマ・ゴールドマンが、現在にもたらすものは何か？

エマとウーマンリブ (2)

はしもと・よしはる

今は女性の仕方で革命を実効させる時です—女性の失われた尊厳を回復する時なのです。そして、人類の一部として、自己変革によって、この世界を変革するよう務める時です。
—女性の権利擁護—
メアリー・ウォルストンクラフト (1759~1797年)

これまでの女性解放

運動は、言葉の上で Women's Emancipation から Women's Liberation へと変化した。しかしその主要な流れは、フェミニスト運動

と社会主義運動の2つではないかと思われる。そしてここでの特長は女性の権利の自覚であろう。

むろん聖書の解釈によれば、イウはアダムのアバラ骨の一本から作られたのであった。レベッカの結婚(旧約聖書)、雅歌の詩編に見える恋愛感情の吐露は、いづれの民族にも多かれ少かれ共通のもので、強いていえばそこには族長支配の庇護の下で女性の在り方が規定されているのだ。キエルケゴールはレベッカの結婚において自分とレギネとの関係を透視して、新しいキリスト教神話へ昇化させているがこれは霊(Soul)の問題であって、それはドイツの神秘家ヤコブベーメがキリストに男女同性を具有した神人を認めたのと同じ意味があるだろう。

結婚が制度として指定されるころでは、その裏に売笑が成立する。古代世界ではその主役が女奴隷によって始まったことは衆知の事だ。それ故、アンチゴヌ(ソホクレスの劇)が勝気の男まさりで、その所業が叔父クレオンの支配する国法と衝突したとしても、クレオパトラが全エジプトに号令したとしても、それが女性の権利の伸張に貢献したという事実は残していない。同じように17世紀の英国はエリザベス女王の治世であるが、シェークスピアにとって〈弱き者、汝の名は女〉であり、オフェリア(ハムレット)、コーデリア(リア王)、ジュリエット(ロメオとジュリエット)の特長は、無邪気(innocent)であった。とすれば権力支配の男世界の中で、女性が自分の欲望を達成しようとすれば、男と同じ権謀術策を駆使しなければならず、それは破滅に至る道として、マクベス夫人やクレオパトラに形象化されざるを得なかったと思われるのである。ルネッサンス期でさえそうであ



アイデア出版案内

エマ・ゴールドマンには人生がある。トルストイやモーパッサンの小説が、我々に与える人生だ。だから、彼女自身が一つの芸術、ペンでもなく、筆でもなくその体と行動で書いた芸術だ。街の女になろうとしたエマ、モストへの怒り、出獄してきたサーシャを迎えるエマ、その一つ一つに、誰もが人生を感じるだろう。

- ▶わが生涯を生きるより
 - ▶アナキズム
 - ▶女性解放の悲劇
 - ▶クロンシュタットの印象
 - ▶P・クロボトキンの印象
 - ▶裏切られた革命
- 他—

女性解放の悲劇

定価 750円
直接購読申込者には、送料共定価の2割引(600円)でお送りいたします。

過渡期論批判 2

西塔 昌弘

過渡期論がアナキズムにおいて否定されるのは、アナキズムの主體的な性格ばかりでなく、もう一つ、それが本質的に生産主義と結びついていることによる。アナキズムは基本的な思想性として反生産主義である（それ故バクーニン主義からクロボトキン主義への流れは、アナキズムにとって一つの前進であった）。アナキズムとは反宗教思想であり、生産主義とは、一個の宗教理念だからだ。このことは、アナキズムが資本主義ともマルクス主義とも、決定的に対立する思想であることを示している（バクーニンのアナキストとしての最大の間違いは、彼の破壊の思想をヘーゲル弁証法と結びつけたこと、及び、マルクス主義との真の対立性を、プロ独問題へとづらすことによって、ぼやかしたことだ。）

生産主義と革命思想が結びつくと、そこで問題となるのは、人類の総欲望を満す生産力をいかにして得るかということになる。すなわち、人類の総欲望を満す生産力を得るまでの期間が、過渡期ということだ。生産主義である限り、過渡期の必要性は必然といっている。しかし、そこにおける欲望とは、まさにこの資本主義社会における欲望である（マル

クスは交換価値の分析はしても、使用価値の分析はしなかった。何故なら、彼にとって、それは普遍的な真理だったからだ）。この欲望それ自身を問題にしていこうとした最初の人

はクロボトキンであった。勿論、クロボトキンには欠陥も数多いし、科学＝文化的傾向によって、生産主義から完全に解放されているとはいえない。しかし、この欠陥を大沢さんのように、過渡期論によって埋めようというのは間違っている。それは、あくまでも、生産主義的態度であって、クロボトキン主義は、反生産主義という思想性によってこそ、のり越えられるべきなのだ（大沢さんは、クロボトキンの経済学を持っては、現実の経済の、ひいては政治や社会一般の情勢を正確に分析し、つかみとることができるかどうか、疑わしい、と言っているが、逆に、クロボトキンによって、初めて使用価値が批判の対象として取り上げられる素地ができたことを強調したい。使用価値の、すなわち資本主義社会における欲望の内実及び体系の分析なくして、資本主義社会を完全に捉えたといえるだろうか。資本主義社会における諸使用価値は人間にとって、総て真実なのだろうか。幻想ではない使用価値があるのではないか。もしそうだとすれば、どのような構造によって、幻想が真実と思わされていくのだろうか。また、何故そうしなければいけないのか、それが人間に持つ意味。これらの分析こそ必要なのだ。ここでさらに問題提起するなら、人間にとって、生存の為の諸生産以外は、総て幻想ではないのか）。

生産主義は今、世界を支配している理念である。それには、資本家やマルキストばかりでなく、民衆もまた、拝跪しているのだ。このことは、反生産主義であるアナキズムが民衆に受け入れられないことを意味している。逆に、アナキストが思想を深めていこうとすれば、民衆と分離していかなければならない。アナキズムが結局民衆を得られなかったのは、過渡期論が無かったからというような理由からではなく、このアナキズムの本質から来ているのだ。そして、当然アナキズム内部の動揺分子は、生産主義を捨て切れず、同時に大

衆指向からも抜け切れない（現実には、アナールコ・サンジカリズムとして現われてくる彼らが、最終的にはマルクス主義に吸収されていくと云った八太舟三はその意味で正しい）。勿論、アナキズムも多数の人間を獲得しようとする。しかし、それは大衆が何故生産主義に拝跪するのかということの、批判的分析なしにはありえない。その結果、あるいは永遠にアナキズムは少数者の思想であるかもしれないのだ。

—投稿—

20世紀アナキーの証言

やまもと・あき

その実在のなかのアナキーを拡充せよ！
アナキーはすべての人間の属性である。彼が人間である限り、そして生きている限りその実在である限り。

アナキズムは生きる実在の姿勢である。哲学である。マルキシズムやレーニズムと対比する、社会科学の理論や革命の戦略ではない。違った次元のものである。

アナキズムが社会思想であるとは、マキヤベリズムも社会思想だという次元においての話である。

アナキーは時間と空間を超越した、人間の実在そのものである。

アナキズムの文献が一冊も残らず焚書され、その歴史が一行とも残さず抹殺されてもアナキーにとっては関係がない。

人間が実在する限り、アナキーは常在する。

アナキーは革命的である。永久革命への道だ！流動的であり、持続的であり、生々流転する。

ときに顕現し、生長し、展開し、飛躍し、突然変異し、爆発し、白光し、また沈潜し、準備され、顕在して、止まるところがない。

第三者が、誰れかをアナキストと呼ぶことは自由である。拒否しても意味がない。が自らアナキストと自称するなら、このアナキーは死滅に傾いている。

った。女性が女性であることを自覚して、同性に同じく自己を自覚させる作業は、ヨーロッパにおいて啓蒙時代(Enlightenment)を待たなければならなかった。ルソーは次のように言っている。「女性を男性のように教育せよそうすれば、女性は男性と同じくなり、女性が男性の上に振う力も少なくなるだろう」これに対しメアリーは答える。「わたしは女性が男性の上に力を振うことは望みません。そうではなくてわたし達自身の上に振うのです。」

ではその内実はどうのようなののかを明かさなければならぬ。しかしその前にメアリー・ウォルストンクラフトの伝記的興味を幾らか示そう。彼女は幼女時代から父の放蕩の犠牲になり、若くして家庭教師を勤め、特にフランス語を学びフランスの文物に親しみ、フランス大革命の発生で衝撃を受けたとある。上記の〈女性の権利擁護〉A Vindication of Rights of Woman; 1792年 は彼女自身の結婚の失敗(相手はアメリカへ渡った地質研究者)から男性に対する手きびしさが含まれていると言われる。その後、ウィリアム・ゴッドウィン(政治の正義の著者、アナキズムの鼻祖)と再婚して、メアリー・ゴッドウインを産み、産後の肥立ちが悪くて死んだ。このメアリー(ジュニア)は後に詩人シエリーと結婚して(馳落ち結婚)シエリーとイタリアへ通れ、彼地での夕食会の話題から有名な小説〈フランケンシュタイン〉を創作した。(つづく)

*ウィリアム・ゴッドウィン著「政治の正義—財産編 ¥ 450〉はバルカン社に在庫。

サルトルのなかのアナーキーは、アナキストと呼ばれることに拒絶反応を示している。

アナキズム運動などというものが実在するという幻想、アナキストの歴史というものの意味。アナーキとは無関係である。

1973.7.29

読者だより

第2号、西塔昌弘氏の「直感アナキズム」を読んだが納得出来ない。氏によれば、アナキズムは「言葉ではなく、直感により理解すべきものである」という。そしてアナキストは「言葉を媒介とすることなく、互いに存在するだけで理解し合う」ことが可能であり、それは即ち「アナーキーへの前進」であり、「アナキズム運動にスピード化をもたらし」「それだけアナキズム運動が権力に対し優位に立つ」ことが出来ると、極めてアナキズムにおける直感に多大な比重を置き、楽観的である。

しかし、直感によるアナキズム理解とは具体的に、どういう状態を指すのであろうか一向にわからない（僕が「黙然たる衆」の一人にすぎないのだろうか）。

アナキストが「言葉を媒介とすることなく互いに存在するだけで」各人の思想性を「理解し合う」とは、所謂「同志間の連帯意識」にすぎないのではなからうか。それなら何もアナキストに特有なことでもない。もし、アナキズムにおける直感が西塔氏のいわれるようなものならば、昭和初期のあのアナルコ・サンジカリズムと純正無政府主義の対立も起りえなかったであろうと思う。

アナキストが、資本主義の画一化、国家権力の抑圧、権威主義的社会主義の個性の抹殺の危険を感じ取り、権力に対して潔癖なその豊かな直感を僕も認めないわけではない。

しかし、現代のアナキズムは過去の本能と直感に基づくアナキズムから決別し、アナキズムを理論的に確立することに、その現代的課題があるのではなからうか。この点で西塔氏のいわれる無言の直感ではなく、それこそ

言葉による開かれた対話である。

中央集権的組織の討論は、ある枠内での討論である。自由連合組織の討論はどんな枠も無い。それこそ、これ以上しゃべれないという程しゃべり合い、理解し合う方法こそ、アナキズム理解の方法ではなからうか。

アナキズムは芸術ではない、社会思想である。アナキズムを深化させ、拡大させ、そして社会を変革していくためには、やはり言葉による大衆への宣伝しかない。勿論、豊かな情感も必要なことである。要するに、自由連合のアナキズムであるからこそ、より多くの言葉を必要とするということではなからうか。

笠田真人

ミニ・ニュース

向井孝さんが、「朝日ジャーナル」8月10日号の「原爆特集」記事で、マイクロネシアのビキニ水爆実験の被災者のことを書いている。「原爆ナショナリズム」ともいうべき一國主義的被害者の視点からではなく、マーシャル、在韓被爆者、当時留学中の東南アジア諸国の青年達と、同位置にある日本人民の被爆という視点からの提起は、これからの原水禁運動の方向を示しているのではないか。

後記

エマの「女性解放の悲劇」がようやく出来上ってきた。「らじかる」読者諸氏が残らず読まれること、お願いします。

西塔君の笠田真人氏への反論(云い逃れ?)は次号掲載予定。(流)

らじかる 第4号

発行日・1973年8月1日

編集人・西塔昌弘

発行人・はしもとよしはる

発行所・アイデア出版

東京都新宿区東大久保1-464 松喜ビル

TEL 03-354-1039

年間購読料 300円(送共)